

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26870708

研究課題名(和文) 越南漢籍資料を用いた中国古典歌謡文学の研究

研究課題名(英文) Study of Chinese classical poetry in Vietnam

研究代表者

平塚 順良 (HIRATSUKA, Noriyoshi)

立命館大学・経営学部・非常勤講師

研究者番号：40632807

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：ベトナムは漢文化圏に属し、中国古典文学の大きな影響を受けてきた。本研究は、中国側の資料とベトナム側の資料とを併用することで、ベトナムにおける中国古典歌謡文学の受容について複眼的な研究をおこなうことに成功した。

具体的にはベトナムにおいて、中国古典歌謡文学の一ジャンルである詞がいかに受容されてきたのかに着目し、「ベトナム西山朝の潘輝益と詞牌楽春風」などを論文として発表した。

またベトナムに所蔵される日本関連資料についても調査をおこない、「ベトナム漢喃研究院図書館所蔵の『日本維新列家慷慨詩』および福田英子「致薛錦琴書」について」を論文として発表した。

研究成果の概要(英文)：Vietnam was concluded to the Chinese culture circle once, and influenced deeply by the Chinese ancient literature. We tried to use both Chinese and Vietnamese documents to do some research.

One of the subjects of our research is how did 'Ci(詞)' be accepted by Vietnam, and the thesis Phan Huy ich, poet of Vietnam Tay son dynasty, and Cipai(詞牌) Lechunfeng(樂春風) was published.

We also focused on some documents related to Japan, and published the thesis The Research of Japanese Meiji Restoration Poetry and Fukuda Hideko's Letter for Xue Jinqin which are the Collections of the Institute of Han-Nom Studies.

研究分野：中国文学

キーワード：ベトナム漢文学 阮綿審『鼓榭詞』 潘輝益『星槎紀行』 『日本維新列家慷慨詩』 福田英子「致薛錦琴書」 『国色天香』 八旬万寿盛典 『樂府探珠』

1. 研究開始当初の背景

日本中国学会に日本漢文部会が増設されるなど、近年日本漢学への関心が高まりつつある。また日中韓シンポジウムが多く開催されるなど、東アジア全体で問題を共有しようとする機運も高まっている。ところでベトナムは現在では東南アジアの一員と見なされることが多いが、元来漢文化圏に属する。東アジア漢文化の問題を考える際に、ベトナムを等閑視するようでは、不十分と言わざるをえない。日本漢文学が可能であるならば、ベトナム漢文学も可能なはずである。ベトナム漢文学の研究を進めることは、東アジアの漢文学を考察する上で、これまで欠けていた視角を補うことにつながる。

2. 研究の目的

中国文学はベトナムでどのように受容されたのか。また受容された中国文学は、ベトナムでどのように現地化したのか。具体的にどのような書物を通じて、中国文学はベトナムに伝わったのか。これらを明らかにすることで、漢文化が南方へどのように広がったかを知ることができる。また日本・朝鮮の漢文学と比較して、ベトナムでは漢文学の受容や現地化にどのような差異が見られるのかを知ることができる。中国文学という枠組みではなく、東アジア漢文学という視点から様々な課題を問い直すことを目指す。

3. 研究の方法

(1)ベトナムにおける漢文学の受容を研究する際、その受容の長い歴史・多岐にわたる文学ジャンルの全体を研究することは短期間では困難である。そこで研究範囲を、中国古典歌謡文学、とくに詞曲に限定することによって、効率的に研究成果を発表することができる。

(2)ベトナムにおける漢文学の受容を研究するためには、そもそも中国古典歌謡文学に対して十分な知識を有している必要がある。そこで、中国古典歌謡文学そのものの研究も同時に進行させる必要がある。その上でこそ、中国古典歌謡文学がどのようにベトナムで受容されたのかを明らかにすることができる。

(3)ベトナムの漢喃研究院は、多くの漢文資料を収蔵しており、ここで資料調査をおこなうことで、ベトナム・中国双方の資料を活用することができるようになり、複眼的な研究が可能となる。

4. 研究成果

(1)中国古典歌謡文学がベトナムでいかに受容されたのかを研究するには、そもそも中国古典歌謡文学に対する知識が必要である。本研究は、中国古典歌謡文学の中でも詞曲に対象を限定することで、効率的に研究成果を

発表することを目指した。そこで明代の詞曲に関する研究をおこない、「『呉騷三集』について」・「名古屋大学文学部図書館蔵『楽府逸奇』について」・「明代の櫟括とその周辺」の3論文を発表した。こうした明代の詞曲研究は、ベトナムにおける詞の受容を考える上で、大変有益な前提となった。「ベトナム西山朝の潘輝益と詞牌楽春風」では、明代末期の『国色天香』という書物が、ベトナムにおける詞の受容に大きな役割を果たしたことを論じたが、こうした知見は「『呉騷三集』について」・「名古屋大学文学部図書館蔵『楽府逸奇』について」・「明代の櫟括とその周辺」のような明代の詞曲研究が基礎にあったことにより得られた。

(2)ベトナムの漢喃研究院において、漢籍調査をおこない、ベトナムにおける詞の受容について関連する資料を収集した。「越南漢喃研究院図書館蔵『楽府探珠』と阮綿審『鼓柷詞』」には、漢喃研究院における資料調査の成果が多く反映されている。ベトナムにおける詞の大成者として筆頭に挙がるのは、阮朝の皇子阮綿審である。この阮綿審の詞集『鼓柷詞』は、ベトナムでは散佚してしまい現存せず、中華民国二十五年に中国で発刊された雑誌『詞学季刊』第三巻第二号に収録されたもののみが残されている。なぜ阮綿審の詞集『鼓柷詞』が、ベトナムには現存せず、かえって中国に残されているのだろうか。ベトナムの阮朝は、如清使と呼ばれる使節を清朝へ頻りに派遣していた。この如清使は、中国へ赴く際、『鼓柷詞』を携帯して行き、途上で出会う清朝の文人にこれを示し、添削を求めていることが、中国側の様々な文献から分かる。『詞学季刊』に収録される『鼓柷詞』の底本は、如清使が途上で清朝文人に添削を求めた際、その文人が書き留めておいたものである。また『詞学季刊』は、所々に異文を併記する。この併記された異文というのは、つまり清朝文人が添削を加えた痕跡であることを本論では指摘した。ところで漢喃研究院が所蔵する『楽府探珠』には、阮綿審の詞がいくつか採録されているが、文字は『詞学季刊』が異文とする方を採用している。また『詞学季刊』に収録されない阮綿審詞を収録する。『楽府探珠』が編纂に際して参考にした『鼓柷詞』は、『詞学季刊』の底本よりも後に編集されたものであるはずだ。如清使は、『詞学季刊』の底本になったテキストを持ってベトナムへと帰還した。阮綿審はその添削の跡を見て、自作を修正した。またその後新たに詞を作った。それらが『楽府探珠』の収録する阮綿審詞には反映されている。

(3)ベトナム詞の集大成者阮綿審は阮朝に活躍したが、その前朝に当たる西山朝ではどのように詞が受容されたのか。「ベトナム西山朝の潘輝益と詞牌楽春風」では西山朝の潘輝益が、清朝乾隆帝の80歳を祝賀する詞を製

作する際に、どのような書物を手本にしたのかを考察した。潘輝益は大変特殊な詞牌を使用しており、このことからおそらく明代末期の通俗類書『国色天香』を手本にした可能性が高い。この研究成果は、『呉騷三集』について、「名古屋大学文学部図書館蔵『楽府遊奇』について」、「明代の櫟括とその周辺」のような明代詞曲研究の基礎の上に成り立っており、本論では明代詞曲研究とベトナム漢文学研究とを融合して論じること成功した。潘輝益が、通俗類書を参考にして詞を製作したことは、詞譜のような詞を作る際に用いる基本的な書物が手元になかったことを意味する。このことは、ベトナムにおいて詞が盛んに受容されてこなかったことを示す。この後、阮綿審が出現して、ベトナムの詞は高い水準に至る。この間にどのような詞籍がベトナムに伝来し、いかなる詞学の蓄積の上で、阮綿審の詞が現れたのかは、検討に値するテーマである。

(4)ベトナムの漢喃研究院には、日本に関連する資料もいくつか所蔵されている。本研究の中心課題からは外れるが、こうした資料についても調査をおこない、その成果を「ベトナム漢喃研究院図書館所蔵の『日本維新列家慷慨詩』および福田英子「致薛錦琴書」について」として発表した。ベトナムの漢喃研究院に所蔵される『日本維新列家慷慨詩』を、その始点にまで遡ると西村三郎『近古慷慨家列伝』にたどり着く。しかし、『日本維新列家慷慨詩』は、この『近古慷慨家列伝』を直接参考にして編纂されたものではない。日清戦争後、中国は近代化を目指し、大量の和書を漢訳するようになった。その中に、『近古慷慨家列伝』の漢訳本である趙必振訳述『日本維新慷慨史』がある。この漢訳の出版には、梁啓超が深く関わっている。この頃、ベトナムでは梁啓超の論説がよく読まれており、梁啓超が関係した『日本維新慷慨史』もおそらくベトナムに伝来していた。ベトナムの漢喃研究院が所蔵する『日本維新列家慷慨詩』は、この漢訳本『日本維新慷慨史』から、漢詩文のみを抽出して編纂されたものである。趙必振は『日本維新慷慨史』凡例において、この書物によって明治維新の実情を知らせ、中国の近代化に役立てることが目的だと説いている。ところが『日本維新列家慷慨詩』を編纂した人物は、明治維新の実情が述べられた部分を削除し、その漢詩文のみを抽出している。ベトナムの阮朝は、元々清朝の冊封体制の下にあり、阮朝文人にとって国外との交渉とは漢詩文の応酬のことであった。その後、ベトナムはフランスの植民地統治下に入り、いかに西洋列強と対峙するのが主要な問題となった。『日本維新列家慷慨詩』を編纂した人物にとって、いかに西洋列強と対峙するのかという問題意識はまだ希薄であり、漢詩文の応酬を中心とする旧思想の観点に立脚して、中国から伝来した新思想を伝える

『日本維新慷慨史』を読んでいたと言える。また『日本維新列家慷慨詩』の末尾には、日本の婦人解放運動の魁として知られる福田英子が、上海の一少女薛錦琴に宛てた書簡が附されている。これも梁啓超が深く関わった漢文雑誌『清議報』に掲載されたものが、ベトナムに伝来し、書き写されたのだと思われる。『清議報』に掲載された数ある記事の中から、福田英子の書簡を抜き出したと言うことは、この記事に特別な価値を見出したと言うことである。1900年前後の東アジアにおける女性解放運動を包括的に論じようとする際に、ベトナムにおける漢文雑誌を通じた女性論の受容は、検討に値するテーマである。この研究によって、漢文を通じて日本・中国・ベトナムの三国が結びつく現象を論じることができた。もしも今後も研究を継続する機会が与えられるのなら、東アジア漢文学へと研究を発展させていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

平塚順良、ベトナム西山朝の潘輝益と詞牌楽春風、風絮、査読有、vol.14、2017年、pp.149-173

<http://www.ritsumei.ac.jp/~hagiwara/fujo.html>

平塚順良、ベトナム漢喃研究院図書館所蔵の『日本維新列家慷慨詩』および福田英子「致薛錦琴書」について、立命館文学、査読有、vol.648、2016年、pp.11-20

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/rb/648/648PDF/Hiratsuka.pdf>

平塚順良、明代の櫟括とその周辺、立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要、査読有、vol.9、2016年、pp.41-60

http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/sio/file/kiyou9/no09_03.pdf

平塚順良、越南漢喃研究院図書館蔵『楽府探珠』と阮綿審『鼓柷詞』について、風絮、査読有、vol.11、2014年、pp.26-48

<http://www.ritsumei.ac.jp/~hagiwara/fujo.html>

平塚順良、名古屋大学文学部図書館蔵『楽府遊奇』について、汲古、査読有、vol.66、2014年、pp.7-12,18

平塚順良、『呉騷三集』について、日本中国学会報、査読有、vol.66、2014年、pp.159-171

<http://nippon-chugoku-gakkai.org/utf8/hpkeisai/66/66-11.pdf>

〔学会発表〕(計1件)

童嶺・六反田豊・平塚順良・大木康、東アジア漢籍の沃野 その多様性を考える、東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）2016年5月28日

〔その他〕

Ngyuen Dai Co Viet、中国の少数民族「京族」の暮らし、立命館大学、2015年11月27日

Ngyuen Dai Co Viet、ベトナム語と中国語、立命館大学、2014年7月31日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平塚 順良 (HIRATSUKA, Noriyoshi)
立命館大学・経営学部・非常勤講師
研究者番号：40632807